

Title	サン=ランベールとデイドロの無記名項目：『百科全書』項目「称賛 «LOUANGE»」、「称賛する «LOUER»」を中心に
Sub Title	Les articles non signés de Saint-Lambert et de Diderot : autour des articles «LOUANGE» et «LOUER» dans l'Encyclopédie
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.75 (2022. 10) ,p.33- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20221031-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン＝ランベールとディドロの無記名項目 ——『百科全書』項目「称賛 « LOUANGE »」、 「称賛する « LOUER »」を中心に——

井 上 櫻 子

ロレーヌ出身の詩人ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールは、『百科全書』に少なくとも匿名で27の項目を寄稿していることが確認されているが¹⁾、そのうちの半分以上を占めるのが道徳関連の項目である。こうした項目の中から論者はこれまで、「作法 « MANIÈRE »」²⁾、「名誉 « HONNEUR »」³⁾、「オネット « HONNÊTE »」⁴⁾に注目し、こうした項目の典拠研究を進めるとともに、サン＝ランベールの道徳思想、政治思想について検討してきた⁵⁾。とりわけ、項目「名誉」の考察においては、モンテスキューへ

-
- 1) サン＝ランベールが『百科全書』に寄稿した項目の数については、以下の論考を参照した。François Moureau, « Le manuscrit de l'article *Luxe* ou l'atelier de Saint-Lambert », dans *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 1986, pp. 71–84.
 - 2) Saint-Lambert, « MANIÈRE », dans l'*Encyclopédie*, t. X, 1765, pp. 34–36.
 - 3) Saint-Lambert, « HONNEUR », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, 1765, pp. 288–290.
 - 4) Saint-Lambert, « HONNÊTE », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, 1765, pp. 286–287.
 - 5) 井上櫻子「サン＝ランベールと『百科全書』——項目「作法 « MANIÈRE »」をめぐって——」、『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第67号、2018年、pp. 19–32。井上櫻子「サン＝ランベール、モンテスキュー、そしてエルヴェシウス——『百科全書』の項目「名誉 « HONNEUR »」を中心に

の反論という形をとりつつ、功利主義的観点から「名誉」の復権を行い、エルヴェシウスの人間論の弁護を行っていることを確認した。サン＝ランベールは、法が遵守され、市民が良識を備えた国家においては、「名誉心」が犯罪の抑止力として機能するとし、その社会的有用性を強調しようとするのである。

ところで、「名誉」と同様、優れた行為に対して与えられるものとして「称賛」が挙げられるが、『百科全書』において該当する項目を執筆しているのもサン＝ランベールである。本論考では、項目「称賛 « LOUANGE »」を出発点としつつ、やはり無記名項目でありながらデイドロが執筆したものとされる「称賛する « LOUER »」と比較検討しながら、二人の道德思想の関係性について考察してみたい。

I. サン＝ランベールの執筆項目「称賛」と「お世辞」

「称賛」という語について、サン＝ランベールはまず、次のように定義している。

それ [= 称賛] は、人あるいはなんらかの存在の行為、所産、資質の美点を引き立たせる発言、文書、行動である。人は皆、「称賛」を望んでいる。それは自らの美点について疑いを持っていて、称賛が自分には弱点があるという気持ちに対して安心させてくれるからであるか、あるいは称賛が社会の最も大きな特権、すなわち公衆の評価を得るのに貢献してくれるからである⁶⁾。

「称賛が自分には弱点があるという気持ちに対して安心させてくれる « elle les rassure contre le sentiment de leur faiblesse »」という一節は、やはりサ

に——」、『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第70号、2020年、pp. 95–106。井上櫻子「『百科全書』項目 « HONNÊTE » にみるサン＝ランベールの政治道德思想」、『藝文研究』第121(2)号、2021年、pp. 47–55。

6) Saint-Lambert, « LOUANGE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 697.

ン＝ランベールの執筆項目である「お世辞« FLATTERIE »」の次の一節を思い起こさせる。

お世辞は一方はだます必要があり、もう一方はだまされる必要のある人々の間で生まれた。宮廷においては、利益が最も行き過ぎた称賛を職務上の功績や才能の面で取り柄がない施し手にふんだんに与える。人は施し手の弱点について安心させることで彼らを喜ばせようとするが« on cherche à leur plaire, en les rassurant sur des faiblesses », その弱点がなおるとしたら残念に思うだろう。施し手に弱点があればあるほど、人は彼らを褒めちぎる。それは、彼らを尊敬してはおらず、彼らが賞賛される必要があると知っているからである⁷⁾。

さらに、この引用文冒頭の「お世辞は一方はだます必要があり、もう一方はだまされる必要のある人々の間で生まれた」という一節は、項目「称賛」末尾の次の一文と関連づけられるだろう。

ラ・フォンテーヌがなんと言おうとも、彼 [=オネットム] は、神は無理でも——というのもだませそうにないから——、だませそうな恋人や王については過剰に称賛することができる気づくのである⁸⁾。

1797年から1801年にかけて刊行された『サン＝ランベール著作集』(*Euvres philosophiques de Saint-Lambert, Agasse*) 第6巻には、サン＝ランベールが『百科全書』に寄稿した項目の一部が収録されており、彼の執筆項目を同定するための重要な資料とされてきた。項目「お世辞」は『サン＝ランベール著作集』には収録されていないものの、項目「称賛」に展開される議論との類似点が見出されることから、J. ラフの執筆者同定の妥当性が確

7) Saint-Lambert, « FLATTERIE », dans l'*Encyclopédie*, t. VI, 1756, p. 844.

8) Saint-Lambert, « LOUANGE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 697.

認される⁹⁾。

また、『百科全書』に先行する辞書類を参照すると¹⁰⁾、項目「お世辞」も項目「称賛」も1743年刊行の『トレヴー辞典』の定義を踏まえたものであることがわかる。例えば、項目「お世辞」においては、「最も行き過ぎた称賛」がなされる場として「宮廷」が挙げられているが、これは、『トレヴー辞典』の「宮廷は『お世辞』がかなり流行っている場所である」¹¹⁾という一節を意識したものと考えられる。また、項目「称賛」末尾のラ・フォンテーヌへの反論は、『トレヴー辞典』の以下の一節を下敷きにしていると言えよう。

へほ詩人たちに讃えられるこの飲料、
ムーア人にふんだんに振舞われ、
地上のあらゆる神々を酔わせる美酒、
それは、称賛¹²⁾。

称賛は、「神々をも酔わせる美酒」だとするラ・フォンテーヌに対し、サン＝ランベールは、過剰な称賛はもっぱら王や恋人をだまし、その心を惹きつけるために用いるものと主張し、「うわべ « paraître »」がものの「本質 « être »」以上に効力を発揮する社交界のあり方を浮き彫りにしている。項目「称賛」や「お世辞」において強調される「うわべ」と「本質」の対立は

9) F. Moureau, *art. cit.*, p. 73.

さらに、項目「名譽」の記述との類似点も、項目「お世辞」がサン＝ランベールによるものであることの傍証となるだろう。

10) 辞書史の流れの中に『百科全書』を位置付けて再読する必要性については、以下の文献を参照のこと。Marie Leca-Tsiomis, *Écrire l'Encyclopédie. Diderot ; de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, SVEC 375, The Voltaire Foundation, (1999) 2008.

11) « FLATTERIE », dans le *Dictionnaire universel français et latin*, t. III, 1743, p. 283.

12) « LOUANGE », dans le *Dictionnaire universel français et latin*, t. IV, 1743, p. 363.

モラリストたちによって断罪されてきたものである。実際、『トレヴー辞典』の「称賛」や「お世辞」には、ラ・ロシュフコーやサン＝テヴルモンが引き合いに出されており、『百科全書』の項目執筆時のサン＝ランベールはこうしたモラリストの伝統を踏まえていたと考えられるが¹³⁾、さらに、「うわべ」が人の心理に与える効果に注目する姿勢は、項目「作法」にも認められるものである。この項目の中で、サン＝ランベールは君主政下において「作法」が人々に道徳的感情を保持させ、良き習俗を維持させることを可能にするものだと主張している¹⁴⁾。「うわべ」へのこだわりは、多くのモラリストによって批判されてきたにもかかわらず、サン＝ランベールは「うわべ」の争い難い心理的影響力に注目することによって、その社会的有用性を見出そうとする。つまり彼は、「うわべ」の持つ影響力を、それが積極的なものであれ消極的なものであれ、強く意識しているのである。

II. デイドロによる項目「称賛する « LOUER »」

ところで、「称賛 « louange »」の動詞形「称賛する « louer »」について定義した項目は、無記名項目でありながら、フランス科学アカデミーが管理する『百科全書』電子批評版プロジェクトが運営するサイトによれば、J. ラフの提案¹⁵⁾とM. レカ＝ツイオミスによって示された基準¹⁶⁾に基づいて、ディ

13) « FLATTERIE », dans le *Dictionnaire universel français et latin*, t. III, 1743, p. 283, et « LOUANGE », dans le *Dictionnaire universel français et latin*, t. IV, 1743, p. 363.

14) Saint-Lambert, « MANIÈRE », dans l'*Encyclopédie*, t. X, 1765, p. 36.

この点については、以下の拙論で考察している。井上櫻子「サン＝ランベールと『百科全書』——項目「作法 « MANIÈRE »」をめぐって——」、『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』第67号、2018年、pp. 19–32。

15) Diderot, *Œuvres complètes*, édition H. Dieckmann-J. Proust-J. Varloot, Hermann, t. V, pp. 211–220.

16) Marie Leca-Tsiomis, « L'*Encyclopédie* et Diderot : vers de nouvelles attributions d'articles », dans *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 55, 2020, pp. 119–133 ; *id.*, « L'*Encyclopédie* et Diderot : découvertes ! », dans *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 56, 2021, pp. 5–26.

ドロによるものとされている¹⁷⁾。

『百科全書』におけるディドロの執筆項目は、見出し語の左肩に付されたアスタリスクによって示されるのが通例であるが、1765年に刊行された第8巻以降、この大事典の編集長が執筆したものでありながら、無記名の項目が数多く認められるとされる¹⁸⁾。M. レカ = ツィオミスによると、『百科全書』の無記名項目の中から、ディドロのものと同定するための基準として、「文法」に関わる項目であること、また、典拠として『トレヴー辞典』が用いられていることを挙げている¹⁹⁾。そして、項目「称賛する」は「文法」に分類されるものであるのみならず、この項目には『トレヴー辞典』の記述との連続性を思わせる一節が認められるのである。本項目冒頭で、ディドロは「称賛する」とは、「好意的に捉えていると示すことだ « c'est témoigner qu'on pense avantageusement »²⁰⁾と定義した後、動詞「～すべきである « devoir »」の条件法を用いて「称賛は常に敬意の表現であるべきなのに « La louange devrait toujours être l'expression de l'estime »²¹⁾と述べて、実際にはそうではないことを匂わせる。この含みのある一節は、『トレヴー辞典』の項目「称賛する」冒頭の一文を踏まえたものと考えられる。

[称賛するとは、] 長所や美徳に対して敬意を示すことである « Donner des témoignages d'estime au mérite et à la vertu »²²⁾。

名詞形の「称賛」に関する項目の冒頭にも同様の記述が認められるが²³⁾、い

17) <http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedie/article/v9-1950-0/#>

18) Marie Leca-Tsiomis, « L'Encyclopédie et Diderot : vers de nouvelles attributions d'articles », dans *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 55, 2020, p. 119.

19) *Ibid.*, pp. 121–126, pp. 127–129.

20) Diderot, « LOUER », dans *l'Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 698.

21) *Ibid.*

22) « LOUER », dans le *Dictionnaire universel français et latin*, t. IV, 1743, p. 365.

23) « Témoignage d'estime qu'on donne à la vertu, au mérite » : « LOUANGE »,

ずれにせよ、ディドロは『トレヴー辞典』の定義を出発点としながら、動詞「～すべきである « *devoir* »」の条件法を用いて、あるべき称賛の形と実際の称賛のあり方の食い違いを浮き彫りにしようとするのである。

項目「称賛する」の執筆時、ディドロは『トレヴー辞典』の項目「称賛する」のみならず、項目「称賛」を参照していたことが、双方のテキストの付き合わせによって明らかになってくる。

『トレヴー辞典』項目「称賛」：「称賛」は、繊細なお世辞であり、それを受け取る人と与える人を違った形で満足させる。一方は、それを自分の長所の報酬として受け取り、他方は、自らのエスプリと分別を目立たせるために与えるのだ²⁴⁾。

『百科全書』項目「称賛する」：称賛には、それが向けられる人に長所の欠落、あるいはそれを与える人の認識の欠落という欠点があると述べるのは、おそらくは逆説と言うものだろう²⁵⁾。

上掲の『トレヴー辞典』の一節は、ラ・ロシュフコーの『箴言集』から細部を省略、変更しつつ引用したものであるが²⁶⁾、ディドロは社交生活の現実を写し取るべく、『トレヴー辞典』の記述を変奏している²⁷⁾。

Ⅲ. サン＝ランベールとディドロ

ところで、項目「称賛する」において、ディドロは称賛が節度をもって与えられることがいかに少ないかが強調される。

dans le *Dictionnaire universel français et latin*, t. IV, 1743, p. 362.

24) *Ibid.*

25) Diderot, « LOUER », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 698.

26) La Rochefoucauld, *Maximes*, Froment, 1823, CXLIV, pp. 62–63.

27) ディドロによる『トレヴー辞典』の「書き換え」については以下の論考にも指摘されている。Marie Leca-Tsiomis, « L'*Encyclopédie* et Diderot : vers de nouvelles attributions d'articles », dans *Recherche sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n° 55, 2020, pp. 129–133.

人々の間で称賛ほど浪費されているものはない。称賛ほど与えられるときに気品がかけているものはない。好意や親切心には、抗議の念や不誠実さ、誇張があふれているが、羨望や虚栄心が必ずと言っていいほど邪魔をし、称賛に不自然な様子を与え、それを無味乾燥なものにしてしまう²⁸⁾。

ここでデイドロは社交生活において人々が見せる「好意」や「親切心」が「うわべ」のものに過ぎず、背後にある「羨望 « l'envie »」や「虚栄心 « la vanité »」が心からの称賛を捧げることをさまたげるとしている。その結果、誠意のともなわない口先だけの「称賛」の「浪費」が横行しているというのである。

ところで、「虚栄心」や「羨望」は、心からの称賛を阻むものだという議論はサン＝ランベールの執筆項目「称賛」にも見出されるものである。

寵愛を得ようとする卑しい打算、好意を得ようとするつまらない虚栄心は「称賛」を浪費し、羨望は称賛することを拒む²⁹⁾。

また、デイドロによれば、うわべだけの「好意や親切心には、抗議の念や不誠実さ、誇張があふれている」とされるが、項目「称賛」にも「オネットムは人々の中から良いところを見出しつつ、それを誇張することはなく、欠点や過ちについては黙っている」³⁰⁾ という記述が見出される。つまり、『百科全書』の編集長同様、サン＝ランベールもまた、社交生活における理想の人間像を体現した「オネットム」は、長所を「誇張」して語ったり、「欠点や過ち」を偽って褒め称えるような「不誠実さ」を示したりすることはないと考えているのである。項目「称賛する」の末尾には、項目「称賛」を参照

28) Diderot, « LOUER », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 698.

29) Saint-Lambert, « LOUANGE », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 697.

30) *Ibid.*

するようにとの指示が明記されている³¹⁾。もっとも二つの語は派生関係にあるから、参照指示が織り込まれるのは当然ともいえるかもしれないが、それだけでなく、社交生活における「うわべ」と「本質」の対立、そして「うわべ」の心理的影響力に注目して議論を進めるスタイルに共通点がみられることは等閑視できないだろう。先に述べたとおり、サン＝ランベールは項目「作法」において、それがただ体裁を取り繕うためのものではなく、模範的行動を守らせる一種の法のような役割を持つことを浮き彫りにしているが、ディドロもまた項目「様子、態度 « AIR, MANIÈRES »」、流儀 « FAÇON »」において、作法の社会的機能について議論している³²⁾。ここで思い出されるのが、項目「作法」や描写詩の代表作『四季』において、サン＝ランベールがディドロの感覚論的人間論を支持し、外界から得られる物理的感覚が精神に与える影響を強調していることである³³⁾。こうした背景を踏まえると、「称赞」という行為をめぐる考察は、二人の思想家の間に築かれた協同関係に基づいて進められたと考えられるだろう。

サン＝ランベールが匿名で『百科全書』に寄稿した項目「天才 « GÉNIE »」³⁴⁾が、長らくディドロによるものであるとみなされてきたことはよく知られている。それは、この二人の人間論に共通点が見出されることも無関係ではないだろう。『百科全書』の無記名項目の執筆者同定を行うこと

31) Diderot, « LOUER », dans l'*Encyclopédie*, t. IX, 1765, p. 698.

32) Diderot, « AIR, MANIÈRES », dans l'*Encyclopédie*, t. I, 1751, pp. 236–237, et *id.*, « FAÇON », dans l'*Encyclopédie*, t. VI, 1751, p. 359.

33) Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, texte établi et annoté par Sakurako Inoué, STFM, Classiques Garnier, 2014, « Introduction », pp. 17–27.

サン＝ランベールが感覚論的人間論を晩年まで保持し続けたいことは、『普遍のカテキスム』「序文」から確認される (Saint-Lambert, *Le Cathéchisme universel*, dans *Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, t. II, « Introduction », p. 1)。

34) Saint-Lambert, « GÉNIE », dans l'*Encyclopédie*, t. VII, 1757, pp. 582–583.

は容易ではなく、この大辞典に関する研究の中でも残された問題系の一つとされている。しかし、こうした項目の生成研究を行うことは、この大辞典の編集工房の内実を新たな視点から明らかにすることを可能にしてくれると考えられる。

(付記) 本研究はJSPS 科研費 17K02601 および 20K00478 の助成を受けたものです。